

じゅん文学

愛知県

自由に入会、気ままに退会

創刊は一九九四年六月一日である。年間4号発行して一〇〇号まで二十五年かかった。始めはそれでやめようかと思っていたが、同人の大半がもつと続けたいという意見だったので、一一〇号迄、年三号ということにして、現在、一〇六号を制作中である。同人数は三十五人。

私は二十三歳で小谷剛主宰の同人誌『作家』に入れてもらった。小谷剛とは戦後第一回芥川賞受賞者であり、その受賞作も『作家』十一号に掲載された作品である。当時の芥川賞は同人雑誌からの推薦作が多く、商業誌の新人賞から選ばれるようになったのは一九七六年の村上龍氏あたりからではなかったか。小谷剛の両親とともに享年九十歳以上だったので、小谷主宰も長生きされるだろうと、安心していただけたが、突然、結腸癌にかかって、六十六歳で逝ってしまった。月刊で四十四年、五一六号で終刊。

『作家』での私は約三十年で三十一の作品を発表したのだが、終刊後、どうしようと思った。私は時々『文藝界』などの同人雑誌批評で褒めてもらうだけで満足していて、新

人賞に応募する意欲も実力もなかった。

それでも幸運なことに、当時は名古屋で経営していた出版社が、『作家』に掲載された小説を本にして出版してあげると言ってくれた。自費ではなく商業出版してくださったのだが、売れなくて評論家の目に留まることもなく、作家デビューすることもできなかった。だが、取り敢えずは、同人雑誌に書いていても、読んで認めてくださる人がいるとわかって嬉しかった。

結局はこれからも同人雑誌で書いていこうと思ったのだが、そのためには、同人雑誌を創刊しなければならぬということでもあった。小谷主宰が病気になる前から、私はカルチャーセンターの講師の代役をしていて、その受講生



25周年・100号記念祝賀会



が発表の場を求めている。つまりその人達にも発表の場が必要であった。幸いに私は『作家』時代に編集の手伝いもしていたので、何とか自分で同人雑誌を創れるだろうと一念発起した。

『じゅん文学』という誌名は最初の同人十人くらいで決めた。同人の中には、いわゆる純文学を書く人ばかりではなく、直木賞受賞作のような読み物作品を書く人もいたので、平仮名の「じゅん文学」にしたという次第。

次は創刊号の「あとがき」だが、まったく自信のない文章で恥ずかしい。

「同人誌は無理に続けようとしたり、情性で続けるものではない。仲間がいるうちは八年くらい続けたいと思うが（私の定年）、もしかしたら一年も続かないかもしれない。二十一世紀になっても、果たしてひとびとは、文学に対して『じゅん』な気持ちでいられるのだろうか。何事も命と同じで、先のことはわからない」

ちなみに「私の定年」とは、六十歳のことであり、創刊時は五十二歳であった。一九九四年は大江健三郎氏が日本人では川端康成に次いで二番目のノーベル文学賞を受賞した年であった。川端康成のデビューは同人誌からであったが、大江健三郎氏はもう、普通の意味での同人雑誌からはなかった。「じゅん文学」はそんな年に誕生した。

創刊以来、いろいろ大変ではあったが、幸いなことに文

明の利器が救ってくれた。『作家』の頃は活版印刷で、編集や校正に苦勞したが、その頃、ワープロというものが出現、一九九五年にはマイクロソフト社のWindows 95が発売され、インターネットが始まった。

早速に、提出原稿は手書きではなくCDかEメールでの添付ファイルで、ということにした。結果、思いがけなく全国的に同人になりたいという人が増え、沖縄や九州などの遠方からの入会もあった。自由に入会できて、気ままに退会を許可したので六十人以上の同人がいた時もあった。

十年二十年と続けているうちに、優秀な書き手がたくさん入会してきた。合評会などで切磋琢磨したからか、各方面での文学賞を受けたり、新聞や雑誌で高評価を受けた人も多い。

そんななかで終刊を決めたのは、私も来年は八十歳だからである。視力も体力も弱ってきて、急に倒れた時のことを考えると、元氣なうちに終わったほうが良いと思った。

他の人に頼んではと言ってくださる方もいるが、パソコンでの書式設定や編集作業など、ひとりでやってきたので、今さら依頼することは難しい。

紆余曲折はあったが、終刊まであと5号、何とか無事にたどり着きたい。終刊近くになって「文芸思潮」さんに紹介されることになり、最高の思い出になった。謹んで御礼申し上げます。

(主宰／戸田鎮子)

「じゅん文学の会」

主宰／戸田鎮子

〒463・0003

愛知県名古屋守山区下志段味字西の原八九七

電話・FAX 052・718・1493

Mail = s-adot@gctv.ne.jp